

平成 30 年度

読書感想文コンクールを終えて

教育支援センター運営委員会

本コンクールは今年で第43回目となりました。1年生200編、2年生185編、3年生・4年生から各1編と合計387編の応募がありました。教育支援センター運営委員会の教員8名と国語科教員3名による審査・投票の結果、応募作品の中から次のように4名の入選作を決定しました。すでに1月7日の全校集会放送でもお知らせしましたが、以下にその学生の氏名と作品名を掲げ、榮譽を称えたいと思います。

また、惜しくも入選には至りませんでした。審査の過程で優れた評価を得て佳作となった作品についても、学生の氏名を紹介します。

最優秀賞

電子制御工学科2年 今岡 美杜 知能を求める心は何かを失うのか

優秀賞

物質化学工学科2年 埴淵 幸優 ゼロからトースターを作ることはできるのだろうか
物質化学工学科2年 広部 愛莉 「神の領域」迫るテクノロジー 「ゲノム編集の衝撃」を読んで
物質化学工学科1年 平野 彩 六年かけて感じた「モモ」

佳作

4M 末永 共助	2M 星田 大貴	2M 松山 知央	2M 山岡 智仁
2E 樹下 倭奈乃	2E 坂井 悠真	2E 松本 仁	2E 藪本 健成
2S 村田 仁哉	2S 森本 奏多	2I 西城戸 星龍	2I 山中 一輝
2I 吉岡 春彦	2C 島津 雄斗	2C 東出 侑里	1M 松本 尚樹
1M 三浦 光	1E 坂部 達哉	1E 寶持 和馬	1E 山口 奏人
1S 久米 悠太	1I 香月 あすか	1I 島 千晴	1I 徳持 進一

《最優秀賞について》

今年度の最優秀賞に選ばれた今岡さんの作品は、「アルジャーノンに花束を」を題材に、「知識を求める心が愛情を求める心を排除してしまうこと」を中心に書き進めています。ドラマや映画・舞台化もされているロングセラーですが、今岡さん自身が「洞察する機会をチャーリーが私に与えてくれた」と記しているように、主人公チャーリーに寄り添いつつも、冷静に自分なりの結論を模索しています。そして、知識と愛情のバランスが多少不十分であっても臆する必要はない、主人公の慈悲深さ・心を取り戻す姿からバッドエンドではない、と述べています。本文からの引用も効果的で、多くの審査員から評価されました。

《優秀賞について》

まず、2年生の作品は、2編とも期せずして科学的なドキュメンタリー作品を元にかかれたものでした。

学生の皆さんの身近でも、最近「遺伝子組み換えでない」という表示のある食品が必ずあるでしょう。広部さんはそのような身の回りのことや授業の動画をきっかけとし、自身の専門分野も関連づけて「ゲノム編集」という技術について考えました。惜しむらくは、若干結論を述べるのが早すぎた感があり、画期的な技術という側面

だけではなく、遺伝子を自由に操作するという、SFのような技術が現実のものとなり、人間、特に技術者がそれをどう使うのか、この本のタイトルが「衝撃」となっている意図についても考察があればよかったです。

「ゼロからトースターを作ってみた結果」(トーマス・トゥエイツ著)は、コンクールの「手引」に入っていた本です。タイトルからして魅力的な、そして内容も現代の大量生産・消費社会について考えさせるもので、何人かの学生が読んでいましたが、まずこの本に着目したという点も評価できます。そして、鉄の精錬の難しさやニッケルの採掘場が汚染されている現実などを述べ、消費者の立場からの反省、ハイテクノロジーに囲まれていながら実際は何も生産できない現代人に言及します。欲をいえば、将来の技術者としての視点からも、この本から考えたことを盛り込んでもらえば、さらに読み応えのある作品になったかもしれません。

1年で唯一優秀賞となった平野さんの作品は、ミヒャエル・エンデのロングセラー「モモ」を、タイトル通り小学校4年からの愛読書として再読した感想をまとめています。児童文学に分類されていますが、まさに「大人こそ読むべき作品」、子どもでも楽しめますが、成長するにつれていろいろな読み方ができる本です。本当に時間を「大切に」するとはどういうことか、小学生のときに思っていたことから現在の自分の考えに発展させており、評価できます。結論の「好きなように使う」ということについて、あと一步踏み込んだ展開があれば、さらによかったですのではないのでしょうか。

《佳作・選外・そして全ての学生に……》

今回は最優秀賞・優秀賞の作品に高評価が集まり、他の候補作は水をあけられた感じで、佳作になったものが多かったようです。また、読まれた本として「火花」(又吉直樹著)や「君の隣臓をたべたい」、太宰の「人間失格」が目立ちました。「手引」にあった「君たちはどう生きるか」「三国志」も数人が読んでいます。「走れメロス」も何人かが読んでいましたが、これは「手引」の「新釈 走れメロス」(森見登美彦)の影響でしょうか。

特に今年の1年生は、国語の課題の感想として「本を読むのが難しい」と書いていた学生も多く、「本よりはケータイ・ネット」という学生も増えているように思います。IT機器は便利ですが、残念ながら、一度に表示できる情報は限られています。複数の本を同時に比較したり、長編の本やある程度の分量の文章を読んで、「論を立てる」「研究する」というときには、やはり紙媒体の方が優れていることも多いのです。少しずつでよいので、「ちょっと背伸びした」長めの文章や本を読む習慣を付けてください。そうすることで、読むことに慣れ、考えを深めることもだんだんと身につけてきます。

また、句点「。」や読点「、」を行頭に書いているものがいくつかありました。原稿用紙の書き方は小学校で習っているはずですが、改行の際「。」や「、」が行頭にくるときは、前の行の末尾に書くことになっています。これもIT機器の影響かもしれませんが、気をつけてください。

さらに、残念ながら「テニヲハ」といわれる、助詞の間違いも目に付きました(「～を入学する」など)。内容では、何の本かわからない感想文や、最後に書名を記していないものも散見しました。「読み手」のことも考え、ある程度はあらすじなどの紹介もしてください。

苦言を呈しましたが、全体としては学生なりに努力をした作品が多くあり、引き続き来年度の応募に期待しています。

(国語科：鍵本)

